

昭和32年度 青少年巡回文庫分類別配布図書冊数

出張所	分類別	総記	哲学	歴史	社会科学	自然科学	工業	産業	芸術	語学	文学	計
信夫	5	9	10	20	6	4	15	13	2	67	151	
伊達	6	9	11	15	7	9	13	11	4	72	157	
安達	2	10	15	27	4	7	14	13	5	83	180	
安積	1	12	10	12	5	5	13	18	3	72	151	
岩瀬	3	10	5	15	7	6	15	15	8	64	148	
南会	1	8	16	16	8	6	16	10	1	68	150	
北会	3	14	13	19	5	10	14	9	2	63	152	
耶麻	0	16	14	16	5	8	13	13	5	68	158	
両沼	2	11	9	17	2	13	14	9	3	72	152	
東白	3	11	10	16	9	7	11	13	6	65	151	
西白	0	13	5	14	11	9	16	10	1	72	151	
石川	2	14	12	15	4	9	13	12	3	73	157	
石村	4	10	6	19	7	7	12	13	7	63	148	
田城	3	10	14	23	5	6	12	13	4	68	158	
石葉	1	15	11	14	1	7	12	15	5	71	152	
双馬	2	13	10	17	6	3	12	15	6	69	153	
計	38	185	171	275	92	116	215	202	65	1,100	2,469	
比率(%)	2	7	7	11	4	5	9	8	2	45	100	

努力しているが、各地に熱心な読書グループが誕生し、現在県内に一八二の読書会が結成されている、県北地区に約五〇の読書会がある。これまでの例を見ると各読書会が孤立しておいて進歩がないため、本年度は会員の親睦と教養の交流をはかるため県北地区に読書交換会を開催した。

これは一つ一つ読書会を孤立した状態におかないで相互に連絡づけるとともに、よりよい方法を他のグループから学んでいこうというものである。

なお読書会運営の参考資料として「県

立図書館と読書普及運動」「読書会のおり」等々各方面に配布、読書会の結成および育成の一助とした。

(5) 点字図書

点字図書奉仕事業の運営面で最も大きなやみは点字図書の出版がきわめて少ないことである。どんなに多くの活字本や雑誌が出版されても盲人にとっては何の意味もない。しかし、それがひとたび点字に訳されると盲人も暗眼者と全く同様に読書のよろこびをもつことができるのである。

点字図書利用状況(昭和32年1月~12月まで)

区分	方部別	県	北	中	南	会	津	浜通り	県外	合計
閲覧人員	男	353	120	21	195	223	10	922		
	女	337	12	—	16	105	—	470		
計		690	132	21	211	328	10	1,392		
閲覧冊数	総計	89	10	—	5	58	—	162		
	哲学	34	3	—	16	20	8	81		
	歴史	40	23	—	22	6	1	92		
	社会科学	30	36	1	10	7	2	86		
	自然科学	125	39	1	54	48	2	269		
	工業	2	5	—	2	2	—	11		
	産業	—	—	—	—	—	—	—		
	芸術	23	—	—	5	9	2	39		
	語学	37	2	—	10	10	—	59		
	文学	849	146	41	305	516	5	1,862		
計		1,229	264	43	429	676	20	2,661		
閲覧状況	郵送	575	132	21	211	328	10	1,277		
	携出	115	—	—	—	—	—	115		
	計	690	132	21	211	328	10	1,392		

この一般の活字本を点字に訳して盲人の利用に供することが本館における点字事業の一番力を注いでいる仕事である。昭和三十年より点訳講習会を県内各地に開き、すでに五〇名の篤志家の奉仕をうけて盲人文化の向上を期しているが、さらにこれが拡充をはかるため本年度は福島、平の二か所に点訳講習会を開催して奉仕者の確保につとめた。(利用

状況別表)

以上館外奉仕の現況の一端を記したが、二百九万余の人口を有する本県の場合、貸出文庫、移動図書館、青少年巡回文庫の活動状況はまだ満足すべき状況にあるとはいえない。これからの館外奉仕の仕事はその数においても、その内容においてもなお多くの課題が残されていることを痛感するものである。